

K. ヴァスマンスドルフ(1820—1906)のドイツ中・近世スポーツ史研究

楠 戸 一 彦

広島大学総合科学部保健体育講座

(1991.10.31受理)

Karl Wassmannsdorff's Beiträge zur Geschichte der Leibesübungen im deutschen Mittelalter und in der frühen Neuzeit.

Kazuhiko KUSUDO

Abstract

Karl Wassmannsdorff (1820—1906) war einer der "Turnhistoriker" im 19. Jahrhundert, und sogar ein Vorläufer in der Untersuchung der Geschichte der Leibesübungen im deutschen Spätmittelalter und in der frühen Neuzeit. Er hat sehr viele Abhandlungen über die Leibesübungen in diesen Zeiten hinterlassen, mehr als die anderen damaligen Turnhistoriker. Seine Interessen für die Geschichtsforschung der Leibesübungen in jenen Zeiten haben sich auf die folgenden Gebiete erstreckt: 1) die Leibesübungen in den Ritterschulen, 2) die Auffassungen über die Leibesübungen von Humanisten und Medizinern, 3) die Etymologie der "Turnworte", 4) die Leibesübungen des Ritters, Bürgers und Bauern, 5) die Wiedergaben der Handschriften über Fechten, Ringen, Schießen und Schwimmen, und 6) die volkstümlichen Übungen (Laufen, Springen, Werfen usw.) und Spiele.

Wenn wir die Geschichte der Leibesübungen in den erwähnten Zeiten untersuchen wollen, müssen wir die Forschungsleistungen Wassmannsdorff's einbeziehen. Folgende vier Punkte sollen deshalb in dieser Abhandlung untersucht werden: 1) Übersicht über Wassmannsdorff's Lebenslauf, 2) Feststellung seiner Interessen für die Turnforschung durch die Titelanalyse seiner Schriften, 3) Feststellung seiner Interessen für die Geschichte der Leibesübungen im deutschen Spätmittelalter und in der frühen Neuzeit durch die Inhaltsanalyse seiner zusammenhängenden Schriften, und 4) Abfassung eines Literaturverzeichnisses von Wassmannsdorff's Schriften mit Bezug auf jene Zeiten.

はじめに

本稿の目的は、19世紀後半にドイツの体育界で活躍した「体育史家」の一人であるカール・ヴァスマンスドルフ (Karl Wassmannsdorff, 1820-1906) に焦点を当てて、ドイツの後期中世から初期近世にかけての身体運動の歴史 (スポーツ史) に対する彼の業績を概観し、それらの文献目録を作成することである¹⁾。

歴史の研究においては、あるテーマに関する先行研究の成果を分析することは、自らの研究を学説史的に位置づける上で重要な作業である。ドイツの後期中世から初期近世（以下「ドイツ中・近世」と呼ぶ）にかけてのスポーツ史の研究に関しては、ドイツでは既に19世紀に様々な成果が現れる²⁾。例えば、A.P.ブディーク(1836)やF.ニーデナー(1881)あるいはA.シュルツ(1889)等によるトーナメントに関する研究、J.C.ヘンデル(1802)やG.フライターク(1867)あるいはA.エデルマン(1890)等による射撃研究、G.ヘルクゼルによる剣術に関する一連の研究、などが挙げられる³⁾。このような「文化史家」と呼ばれる歴史家たちによる研究と並んで、いわゆる「体育史家(Turnhistoriker)」と呼ばれる人たちも、ドイツ中・近世のスポーツに関して多様な研究成果を挙げている。

19世紀のドイツではC.M.バロン(1865)、W.アンゲルシュタイン(1868)、C.オイラー(1881)、H.ブレンディック(1882)、F.イゼリン(1886)などの体育史家によって、通史的な「体育史(Turngeschichte)」が刊行されている⁴⁾。これらの通史的な体育史では、例えばF.A.ランゲに見られるように⁵⁾、古代ギリシャの体育を重視し、中世の体育は否定的に扱われている。しかしながら、中世あるいは初期近世の体育に関する先駆的な研究も出現する。中でも、1880年に刊行されたJ.ピンツの『中世の身体運動』は、ドイツの中世と初期近世におけるスポーツを全体的に叙述した最初の文献である⁶⁾。他方では、W.L.マイヤー、J.パーヴァル、W.クランペ、J.C.リオン、H.F.マスマンなどが、当時創刊されつつあった体育専門雑誌（後述）に、ドイツの中世と初期近世の身体運動に関する個別的な論文を発表している⁷⁾。このような体育史家たちの中でも、K.ヴァスマンスドルフの研究は、中世と初期近世の身体運動の歴史に対する関心の多様さと研究論文の数の上で、当時の他の体育史家の研究成果をはるかに凌駕している。

K.ヴァスマンスドルフのドイツ中・近世スポーツ史研究については、既に岸野が「体育史研究の分野で、実証的・書誌学的方法を最初に取り入れた研究者として高く評価されている」と指摘して、「体育史の研究略史」におけるヴァスマンスドルフの業績の位置づけを試みている⁸⁾。しかし、岸野によるヴァスマンスドルフの中・近世スポーツ史研究の紹介は断片的であり、必ずしも十分とは言い難い。そこで、本稿では、以下のような問題を設定して、ドイツ中・近世スポーツ史に関するK.ヴァスマンスドルフの業績を分析する。

I. ヴァスマンスドルフの生涯と文筆活動。1.彼の生涯を簡単に紹介する。2.彼が発表した著作及び論文の題目から、彼の問題関心の所在を概観する。

II. ドイツ中・近世スポーツ史に対するヴァスマンスドルフの関心と業績。1.ドイツ中・近世のスポーツに関して彼が発表した著作と論文の内容から、彼の問題関心の所在を概観する。2. 中・近世スポーツ史に関する彼の研究の文献目録を作成する。

ところで、本稿で考察の対象とした、特にドイツ中・近世のスポーツ史に関するヴァスマンスドルフの論文及び著作は、当時の体育専門雑誌に発表された論文、及び筆者のドイツ中・近世スポーツ史研究の過程の中で入手した単行本である。但し、残念ながら、彼の非常に数多い文献の中で題目だけ判明して、未だに入手していない文献もあり、その場合には「筆者未見」と記す。

I. 生涯と文筆活動

1. 生涯

ヴァスマンスドルフの生涯に関しては、家族関係も含めて、その詳細はほとんど不明である。ここでは、彼の70才と80才を記念したG.マイヤーとA.M.ベットヒャーの論文、及びベットヒャーとE.ノイェンドルフによる追悼論文、さらにC.オイラーの論文を手がかりにしながら、彼の履歴を略述することに止める⁹⁾。

カール・ヴァスマンスドルフ(Karl Wilhelm Friedrich Wassmannsdorff)は、1821年4月21日にベルリンで生まれた。彼はベルリンの「グラウエ・クロスター」ギムナジウムの第五学年(Obertertianer)であった1836年の復活祭の頃に、初めて「体操(Turnen)」に接した。即ち、彼はE.W.B.アイゼレンが1836年に創設した第二体育学校(Turnanstalt)に入学し、この学校の指導者であったW.リュベックから剣術及びF.L.ヤーンの「体操術(Turnkunst)」を学び始めた。翌年の1837年の夏には、彼はドイツ体操の創始者であるF.L.ヤーンをフライブルク a.U.に尋ね、ヤーンの著書である『ドイツ体操術』(1816)¹⁰⁾を贈られている。

1841年の復活祭にギムナジウムを卒業した彼は、言語学を学ぶためにベルリン大学に進んだ。彼は大学での勉学の一方で、リュベックの体育学校での活動を中止することはなかった。むしろ、彼は体育教師(Turnlehrer)への道を積極的に進み始めている。彼はこの体育学校の助手(Vorturner)あるいは指導者として活動しながら、J.C.グーツムーツ、A.フィート、ヤーン等の体育文献を研究し、また1843年に刊行されたリュベックの『体操教本』の作成にも協力している¹¹⁾。

1844年にベルリン大学での勉学を終えた彼は、兵役を済ませた後の1845年復活祭に、バーゼルのギムナジウムでドイツ語と体育を教える職に就いた。この時、E.アイゼレンは次のような推薦文を書いている：「言語学の学徒であるカール・ヴァスマンスドルフ博士は、私の指導の下に体育訓練を最後までやり遂げた。助手と教師としての働きによって、体育に対する彼の職業能力は十分に証明できる。古今のあらゆる体育の探求と比較における彼の科学的な研究と、彼自身の高い身体的な能力とによって、彼は体育学校の指導に全く適している。ベルリン、1845年5月16日。E.アイゼレン」¹²⁾。バーゼルで在職中に彼は、後に「学校体育の父」と呼ばれたA.シュピースと深い親交を結び、彼の体育理論の構築に協力した。特に、1846年に刊行されたシュピースの『集団体操』の作成に際しては、シュピースは「私の部屋に来て、彼の下書きを読んで聞かせ、私の批判と所見を求めた」¹³⁾。他方、1845年には彼の最初の論文である『シュピースの体操論』を出版し、シュピースの体育論に対する誤解に反論を加えた¹⁴⁾。

バーゼルでのヴァスマンスドルフの教職活動は、僅か2年間に過ぎなかった。1847年には、彼はハイデルベルクに移った。ここで彼は大学、高等学校、高等市民学校、民衆学校で体育を教えた。また、1848年には「体操クラブ(Turnverein)」を創設し、自ら体操の指導を行った。彼は学校とクラブでの体育指導の傍ら、1861年にはバーデン大公国の学校—フェライン—軍隊における体育制度に関する建白書を大公に差し出している。また、1863年1月にはイエーナ大学より言語学博士を授与され、1864年からはドイツ体操団体の技術委員会の委員長を務めている(1892年まで)。彼は1891年にハイデルベルク大学を退官し、その後も精力的に論文を発表していたが、1906年8月6日にハイデルベルクで死去した。

2. 文筆活動

ヴァスマンスドルフは、上述の1845年のシュピースの体操論に関する著作に始まり、16世紀の医者であるH.メルクリアリスに関する1900年の雑誌論文で公的な執筆活動を終了するまで、非常に数多くの論文と著作を発表している。別稿の文献目録が示しているように¹⁵⁾、彼の研究業績の大部分は雑誌論文であり、これらの論文は当時創刊された体育専門雑誌に掲載されている：

『ツルナー(Turner)』(1846-1852、筆者未見)、『新体育年鑑(Neue Jahrbücher für die Turnkunst)』(1855-1894)、『ドイツ体育新聞(Deutsche Turn-Zeitung)』(1856-1943)、『体育制度月報(Monatschrift für das Turnwesen)』(1882-1992)(ヴァスマンスドルフも編集協力者の一人)。これらの雑誌に発表された彼の論文は、書評や雑報などの寄稿を除いても、約250篇に及ん

でいる。また、雑誌論文を単行本化したものを含めて、著作は約30篇に及んでいる。書評などを除いて、彼の著作と論文の題目を通覧すると、ヴァスマンスドルフの研究活動における問題関心は次のようにまとめることができる：1) 体育における運動教材と用具に関する問題、2) 体育における術語に関する問題、3) 身体運動の歴史に関する問題。(本節におけるヴァスマンスドルフの著作と論文については、個々に注を施さない。それらに関しては、別稿を参照のこと)¹⁶⁾

ドイツの体育史あるいはスポーツ史の上で、19世紀は学校体育(Schulturnen)とクラブ体育(Vereinsturnen)との成立期であった。ドイツでは1860年代以降すべての州で体育が学校教育における一教科として取り入れられ、他方で体育クラブは年々その数を増大させ、1860年にはコブルクで「第一回ドイツ体育＝青少年祭」が開催されるに至っている¹⁷⁾。こうした中において、ヴァスマンスドルフの学校体育の教材に対する関心の一つは、シュピースが考案した「秩序運動(Ordnungsübungen)」に向けられており、1868年には『ドイツ学校体育の秩序運動』を出版している。特に、シュピースの死去(1858)の際に遺稿の相続人に指名された彼は、1869年にシュピースの円舞(Reigen)と唱歌円舞(Liederreigen)に関する遺稿を完成させている。学校体育の教材に関する彼のもう一つの関心は、「器械運動(Geräteübungen)」である。彼は平行棒、鉄棒、木馬、シーソーなどでの運動に関する論文を発表している。用具に関する彼の論文の中でも、1875年に『ドイツ体育新聞』に発表した「体育用具の考案と使用の歴史」と題した論文は、それまで彼が用具に関して発表した研究の総括的な論文であり、同時に体育用具の歴史に関する最初の論文として注目に値する。

学校体育における教材と用具に対する彼の問題関心が主として1870年代半ばまでであったのに対して、彼の研究活動を常に支配していた問題関心は身体運動に関する術語と歴史の問題であった。言語学者としての彼は、「ヤーンの時代以後の体育制度の大規模な普及は、識者には分かるように、我々の術語が一種の野蛮化をきたすという結果を伴っていた」という問題意識を終生抱いていた¹⁸⁾。このため、彼にとっては、「我々体育文筆家は我々母国語の精神に逆らわないようにし、運動を表現する体育言語の本質を最後には統一する」ということが、生涯の課題でもあった¹⁹⁾。彼は1861年には『ドイツ体育の術語の統一への提案』を世に問うている。体育における術語の問題の中で、特に彼の関心事であったのは、「Hantel」という語の性を巡る論争であった。この論争は、1858年に刊行されたM.クロスの『啞鈴書』²⁰⁾に対するヴァスマンスドルフの書評²¹⁾に始まり、約30年間に及んだ。この間、彼は体育雑誌に数多くの論文を発表し、また3冊の著作(1877, 1882, 1885)を表している。論争の結果、ヴァスマンスドルフの主張――男性名詞「der Hantel」、複数は「die Hantel」――の正しさが確認された²²⁾。

ベットヒャーはヴァスマンスドルフの80才を記念した論文の中で、次のように述べている。上述の体育専門雑誌に発表されたヴァスマンスドルフの論文について、「比較的小さな報告と、多くの頁を要する書評を除けば、多くは歴史的な内容のある論文181篇を見つけることができた。その内、22篇が体育言語に関するものであり、59篇が実践的な体育経営あるいは用具技術に関するものであった²³⁾。この中の数字はともかく、ヴァスマンスドルフの研究業績の大部分が歴史的な内容のある論文である。これらの論文や著作の題目を通覧すると、彼の歴史研究の関心が次の2つに収斂することが明らかになる。一つは、近代体育の父と呼ばれるべきなのはゲーツムーツではなく、バゼドウであることを論証することである²⁴⁾。もう一つは、ゲーツムーツやヤーンによって始められた「ドイツの体育が決して新しい事柄ではない」こと²⁵⁾、あるいは「モンテニユ、ロック、ルソー以前に、ドイツでも学校体育が既に存在していた」ことを論証すること²⁶⁾であった。前者の問題関心から、彼は18世紀中庸から19世紀前半のドイツの諸体育家――J.B.バゼドウ、G.U.A.フィート、P.ヴィヨーム、ゲーツムーツ、ヤーン、J.F.シモン、E.

デュレ, J.H. ベスタロッチなどへの研究に向かい、『汎愛主義教育学者の体育』(1870)を始めとする数多くの論文を残している。また、グーツムーツとヤーンについての著作も著している。しかし、次節で見るように、後者の問題関心に基づく中世と近世に関する研究は、当時のドイツの体育史家の中でも、研究関心の持続性と論文の多さで傑出している。

ところで、彼の歴史的な問題関心は、近代体育と中・近世の体育の研究に留まらないで、古代の体育に及んでいる。しかし、古代ギリシャ体育への関心は、主として学校体育における教材に関する問題意識に支えられており、オリンピアでの競技会やギムナシオンなどでの体育には及んでいなかった。古代ギリシャ体育への関心の他に、彼は当時(19世紀)の諸外国の体育にも注意を向けていた。例えばフランス、イギリス、アメリカ、アルメニアなどの体育事情について言及し、またエスキモーの身体運動についても考察している。

II. ドイツ中・近世スポーツ史に関する業績と文献目録

1. ドイツ中・近世スポーツ史に関する業績

19世紀半ばに創刊された体育専門雑誌の目次を通覧すると、前述のようにマイヤー、パーヴァル、クランペ、リオン、マスマン等がドイツの中・近世の身体運動に関する論文を発表している。しかしながら、彼らの論文がその時々の発表に終わっているのに対して、この時代の身体運動に対するヴァスマンスドルフの問題関心は、最後の論文に至るまで失われなかった。これに関する彼の論文は、次節の文献目録が示しているように、約60篇に及んでいる。これらの論文の内容を概観すると、彼の問題関心は次のような問題圏にまとめられるだろう。1) 騎士学校(Ritterschule)における身体運動の考察。2) 身体運動に関する人文主義者と医学者の見解の考察。3) 体育用語の語源的な考察。4) 騎士の身体運動に関する考察。5) 剣術・格闘・射撃・水泳に関する古文書の復刻と解説。6) 民衆の身体運動に関する考察。以下では、これらの問題圏に関する代表的な論文を紹介する。(本節での文献に関しては、次節の文献目録を参照のこと)

1) 騎士学校(Ritterschule)における身体運動の考察。この分野の代表的な論文は『バゼドー以前のドイツの学校体育』(1870)である。この中で、彼は1594年に創立されたチュービンゲンの貴族学校「Collegium Illustre」における身体運動を、学校規則から明らかにしている。この他、彼は16世紀の学校における体罰についても報告(1867)している。

2) 身体運動に関する人文主義者と医学者の見解の考察。この分野の代表的な論文は、J. カメラリウスによる1544年の身体運動に関する「対話(De Gymnasiis)」をラテン語からドイツ語に訳した論文(1872)と、身体運動に関する医学者の影響に関する論文(1869)である。後者の論文では、H. メルクリアリスを始めとするイタリア・ドイツの医学者の身体運動に関する見解を紹介している。

3) 体育用語の語源的な考察。前述のように、彼は体育用語(Turnwort)の問題に関して多数の論文を発表しているが、ここでは次の2つの論文が挙げられる。1つはヤーンの標語である「Frisch, Frei, Fröhlich, Fromm」に関する論文(1860)と、「Turn」という動詞に関する論文(1893)である。前者の論文では、16世紀のドレスデンの「系譜(Stammbuch)」を史料にして、この標語が学生の標語であったことを明らかにしている。後者の論文では、11世紀のL. ノトカーの著作を史料にしながら、「Turnen」という動詞が中世では「身体運動を行う」ことを意味するのではなく、「方向を定める(Lenken)、制御する(regieren)」を意味することを明らかにしている。また、この論文では、中世の手書き文書を史料として、「Turner」が中世には「トーナメントとトーナメント戦士」を意味していたことを明らかにしている。

4) 騎士の身体運動に関する考察。ドイツの騎士の身体運動に関する論文(1866)と、騎士・市

民・農民の身体運動に関する論文(1879)の中で、彼は「ニーベルンゲンの歌」や「エレーク」などの英雄文学、あるいはH.ザックスの詩などを史料として、騎士・市民・農民の身体運動を明らかにしている。この他、彼はシュヴァーベンの子爵エーインゲンの騎士旅行に関する論文(1863)、バイエルン公クリストフの身体教育に関する論文(1875)、更にM.ペーハイムの年代記を史料にしたプファルツ選帝侯フリードリッヒの身体教育に関する著作(1886)などを発表している。

5) 剣術・格闘・射撃・水泳に関する古文書の復刻と解説。彼のドイツ中・近世の身体運動に関する研究の中で、後の時代のスポーツ史研究に対する最も重要な貢献と思われるのが、これらの身体運動に関する文書の復刻と原典批判である。剣術に関してはA.デューラーの剣術書に関する著作(1871)、16・17世紀の手書き剣術書と印刷された剣術書に関する著作(1888)、M.フントの1611年の剣術書をラテン語からドイツ語に訳した著作(1890)などを通じて、ドイツで「最初の」手書き剣術書と印刷された剣術書の紹介を試みている。また、剣士団体(Fechtergesellschaft)である「マルクス兄弟団」と「羽剣士団」の相違を問題にした論文(1864)、剣術学校(Fechtschule)に関するテキストとC.ローゼナーによる1589年の「剣術賛歌」とを復刻した著作(1870)、マルクス兄弟団が皇帝フリードリッヒⅢ.から得た特許状に関する論文(1877)などがある。格闘に関しては、デューラーの格闘に関する印刷本の復刻(1870)、F.フォン・アウエルスヴァルトとN.ペーターの格闘術に関する著作の復刻(1869, 1887)などがある。射撃に関しては16世紀のドイツの道化師L.フレクセルとB.ハンによる射撃大会についての詩の復刻(1886, 1887)がある。更に、1576年にシュトラスブルクで開催された射撃祭の際に、チューリッヒの人々が船で参加したことにに関する論文(1870)も発表している。水泳についても、N.W.コリンベーターの水泳書の復刻(1889)を行っている。

6) 民衆の身体運動に関する考察。彼は『ドイツ体育新聞』における一連の「小報告(Kleine Mittheilungen)」の中で、ドイツ中・近世に行われていた様々な種類の走・跳・投(いわゆる「民衆的運動」(Volkstümliche Übungen))について報告している。この他、フィッシャートの『Geschichtsklitterung』(1575)を史料にしなが、15・16世紀の遊戯に関する論文(1899)も発表している。

2. 文献目録

この目録では、ドイツ中・近世の身体運動に関するヴァスマンスドルフの論稿が、著作と論文に分けて記載されている。著作では題目・出版地・出版年を、論文では題目・雑誌名・刊行年・頁を示した。雑誌に関しては、次のような省略を行った。

Jahrbücher ===== Neue Jahrbücher für die Turnkunst.

Turnzeitung ===== Deutsche Turn-Zeitung.

Monatschrift ===== Monatschrift für das Turnwesen.

なお、[]で囲んだ題目の論文は筆者未見であるが、典拠文献から中・近世の身体運動に関係のある論文と思われるので、この目録に載録した。この典拠文献は行を変えて、[]内に示した。雑誌『Deutsche Turn-Zeitung』における一連の「Kleine Mittheilungen」に関しては、その内容を[]内に簡単に示した。

[著作]

Die Ringer-Kunst des Fabian von Auerswald, erneuert von G. A. Schmidt Turnlehrer zu Leipzig, mit einer Einleitung von Dr. K. Wassmannsdorff in Heidelberg. Leipzig 1869.

- Sechs Fechtschulen (d. i. Schau- und Preisfechten) der Marxbrüder und Federfechter aus den Jahren 1573 bis 1614; Nürnberger Fechtschulreime v. J. 1579 und Röseners Gedicht: Ehrentitel und Lobspruch der Fechtkunst v. J. 1589. Heidelberg 1870.
- Die Ringkunst des deutschen Mittelalters mit 119 Ringerpaaren von Albrecht Dürer. Aus den deutschen Fechthandschriften zum ersten Male herausgegeben. Leipzig 1870.
- Das um das Jahr 1500 gedruckte erste deutsche Turnbuch. (Mit Zusätzen aus deutschen Fechthandschriften und 17 Zeichnungen von Albrecht Dürer.) Heidelberg 1871.
- Lienhardt Flexels Reimspruch über das Heidelberger Armbrustschiessen von Jahre 1554. Heidelberg 1886.
- Die Erziehung Friedrichs des Siegreichen, Kurfürsten von der Pfalz. Aus Michel Beheims Reimchronik. Heidelberg 1886.
- Balthasar Hans Ausreden der Armbrust und Büchenschützen. Aus einer Handschrift des 16. Jahrhunderts. Heidelberg 1887.
- Nicolaes Petters Ring=Kunst vom Jahre 1674. Mit deutschen und holländischem Text und 71 Lichtdrucken der Kupfer Romein de Hooghes. Heidelberg 1887.
- Aufschlüsse über Fechthandschriften und gedruckte Fechtbücher des 16. und 17. Jahrhunderts, in einer Besprechung von G. Hergsell: Talhoffers Fechtbuch aus dem Jahre 1467. Berlin 1888.
- Nicol. Wynmanni Colymbetes, sive de arte natandi dialogus. Das erste Schwimmbuch der Welt. Heidelberg 1889.
- Turnen und Fechten in früheren Jahrhunderten. Aufsätzen zur Geschichte der deutschen Leibesübungen aus der Festzeitung für das siebente deutsche Turnfest München 1889. Heidelberg 1890.

[論文]

- [Eiserne Rechstangen] . In: Turner. 1852. S. 133.
[Kleine Mittheilungen. In: Turnzeitung. 1864. S. 388-390.]
- [Eiserne Geräth zum Werfen mit dem Fuße] . In: Turner. 1852. S. 217.
[Kleine Mittheilungen. In: Turnzeitung. 1864. S. 388-390.]
- Das Frisch, Frei, Fröhlich, Fromm als Studenten Wahlspruch vor Jahn. In: Jahrbücher. 1860. S. 251-253.
- Der Wunsch "Gut Heil" vor Jahn. In: Turnzeitung. 1862. S. 50.
- Turn- und Kriegsfahrten des schwäbischen Ritters Georg von Ehingen im 15. Jahrhundert. In: Turnzeitung. 1863. S. 243-246.
- Luthers Ausspruch über Leibesübungen in deutschen Turnschriften. In: Jahrbücher. 1864. S. 257-261.
- Kleine Mittheilungen [1. Gut Heil!, 2. Schwebegehen, 3. Ziehkampf. Die Strebkatze.]. In: Turnzeitung. 1864. S. 209-211.
- Ueber die Marxbrüder und Federfechter und über das älteste - bisher noch unbekannte - gedruckte deutsche Fechtbuch. In: Turnzeitung. 1864. S. 253-256.
- Kleinere Mittheilungen. [1) Aeltere Anekdoten von Fechtern und Ringern. 2) Das "Stangenschieben" des Mittelalters und über Werfen mit Eisengeräthen in älterer und neuerer Zeit. 3) Das "Vollgiren oder Roßspringen"]. In: Turnzeitung. 1864. S. 388-390; 401-405

- Kleinere Mittheilungen [Christus als Turner, und Turner in der Hölle]. In: Turnzeitung. 1865. S. 202-205.
- Die Leibesübungen der deutschen Ritter im Mittelalter. In: Jahrbücher. 1866. S. 194- 207; 253-263.
- Kleinere Mittheilungen [Noch einmal der Phyllos-Sprung, Balentin Trichter's Ritter=Exercitien=Lexicon, Zimmergymnastik im vorigen Jahrhundert]. In: Turnzeitung. 1866. S. 42-45.
- Das "Messerwerfen" in deutscher Vorzeit. In: Turnzeitung. 1866. S. 275-277.
- Klettern als Schulstrafe im 16. Jahrhundert. In: Turnzeitung. 1867. S. 77-78.
- Kleine Mittheilungen [Schwebegehen und Recept gegen den Schwindel, Ziehkampf]. In: Turnzeitung. 1867. S. 311-312.
- Kleine Mittheilungen [Springübungen aus dem Volksleben]. In: Turnzeitung. 1869. S. 209-210.
- Aetzlicher Einfluss auf die sog. Erneuerung der Leibesübungen in Deutschland; ein Beitrag zur Geschichte der Turnkunst. In: Jahrbücher. 1869. S. 111-133.
- Deutsches Schulturnen vor Basedow, oder: Die Turnübungen der beides ältesten deutschen Adelsschulen. In: Turnzeitung. 1870. S. 33-40; 41-42.
- Eine Turn- und Wasserfahrt der Züricher nach der freien deutschen Reichsstadt Straßburg im J. 1576. In: Turnzeitung. 1870. S. 264-266; 269-270; 273-274.
- Eine Würdigung der erzieherischen Bedeutung der deutschen Leibesübungen, aus dem J. 1622. In: Turnzeitung. 1870. S. 306-308; 310-312.
- Wie sprang man vor Erfindung der Springfeiler ?. In: Turnzeitung. 1871. S. 86.
- Das Ringen im Grüblein, nach einer Fechthandschrift des 16. Jahrhunderts. In: Turnzeitung. 1871. S. 120-123.
- Albrecht Dürer, ein Turnschriftsteller. In: Turnzeitung. 1871. S. 125-128.
- Kinder- und Turnspiele, moralisch gedeutet durch die Züricher Amman und Meyer im J. 1657. In: Turnzeitung. 1872. S. 217-218; 221-224.
- Joachim Camerarius's Gespräch über Leibesübungen, vom J. 1544. In: Turnzeitung. 1872. S. 272-273; 279-281.
- Kleine Mittheilungen [Eine Klage v. J. 1591 über Abnahme von Jugend- und Turnspielen in der Schweiz] . In: Turnzeitung. 1873. S. 91.
- Die Leibesübungen an dem 1696 gegründeten Pädagogium zu Halle. In: Turnzeitung. 1873. S. 95-97.
- Turnerische Bildung Bayerischer Fürsten, besonders des Herzogs Christoph von Bayern. In: Turnzeitung. 1875. S. 177-179.
- Zur Geschichte der Erfindung und des Erstgebrauches der Turngeräthe. In: Turnzeitung. 1875. S. 273-277; 294-298; S. 305-307; 313-318.
- Zur Geschichte der Erfindung und des Erstgebrauches der Turngeräthe. Zweite Abtheilung. In: Turnzeitung. 1876. S. 33-36; 49-52; 65-69; 73-76; 89-90.
- Kaiser Friedrich's III. Freiheitsbrief von 10. August 1487 an die Deutschen Meister des Schwerts. In: Turnzeitung. 1877. S. 137-139.
- Irrige Angaben über das altdeutschen Fechterwesen. In: Jahrbücher. 1878. S. 164-169.
- Scharf-fechten zweier Fechtmeister im Jahre 1444. In: Turnzeitung. 1878. S. 375-376.
- Leibesübungen der deutschen Ritter, des Bürger- und Bauernstand im 15. und 16. Jahrhundert. In: Jahrbücher. 1879. S. 153-160; 193-200.

- Dr. Jul. Bintz: Die Leibesübungen des Mittelalters. Guetersloh, C. Bertelsman 1880. S. VI. und 193.
In: Jahrbücher. 1880. S. 128-133.
- Erste Mädchenturn=Büchern der Welt. In: Jahrbücher. 1881. S. 242-272.
- Wer war der erste deutsche Turnlehrer?. In: Monatschrift. S. 18 ff.; 49 ff.; 76 ff. [筆者未見]
- Eine Schwimm-Denkschrift aus dem siebzehnten Jahrhundert an den Kaiser Leopold; die erste Denkschrift in Sachen der Leibesübungen an einen deutschen Fürsten. In: Turnzeitung. 1883. S. 354-357; 370-371.
- Aus dem ersten Schwimmbuche der modernen Welt vom Jahre 1538. In: Turnzeitung. 1885. S. 613-616.
- Hergsell, Gustav: Talhoffers Fechtbuch aus dem Jahre 1467. Prag 1887. In: Monatschrift. 1888. S. 121-138.
- Das älteste in französischer Sprache gedruckter Fechtbuch v. J. 1538 ist eine Uebersetzung des ältesten deutschen Fechtbuches v. J. 1516. In: Monatschrift. 1892. S. 129-139.
- Das Turn-Wort Notkers und der Turnierzeit bedeutet nicht Leibesübungen treiben. In: Jahrbücher. 1893. S. 269-275; 316-322.
- Ein Akrostichon auf den Namen GutsMuths v. J. 1645. In: Monatschrift. 1893. S. 357-360.
- Zur Erinnerung an Hans Sachs. Die Ehebrecher-Bruecke des Hans Sachs und des Jost Amman. In: Turnzeitung. 1894. S. 861-864;
- Der Wettlauf im deutschen Volksleben. In: Turnzeitung. 1896. S. 1029.
- Deutsche Spielverzeichnisse aus dem 15. und 16. Jahrhundert und Maßmanns unrichtige Deutung dieser Spiele. In: Turnzeitung. 1899. S. 78.
- Kleine Mitteilungen [Tiefsprung, Schießen, Wettlauf, Ballschlagen, Steinstoßen, Kegeln, Ziehkampf usw.] In: Turnzeitung. 1899. S. 244-246.
- Eines deutschen Arztes Urteil aus dem Jahre 1588 über Art und Wert von Leibesübungen und Spielen. In: Turnzeitung. 1899. S. 951.
- Spiele und Leibesübungen in deutschen Handschriften, und ein Blick auf das Schulturnen in Deutschland seit dem 16. Jahrhundert. In: Turnzeitung. 1899. S. 1094-1096.
- Ein schöner Turn=Wunsch aus dem Jahre 1599. In: Monatschrift. 1900. S. 23.
- Des Arztes Hieronymus Mercurialis Gesuch v. J. 1573 an den deutschen Kaiser Maximilian II. um Wiederherstellung der antiken Gymnastik. In: Monatschrift. 1900. S. 176-179.

おわりに

ヴァスマンスドルフの歴史研究について、E. ノイエンドルフは1906年の追悼論文の中で、次のように評価している。「身体運動の歴史は、彼が最も好んで没頭したことである。彼はあらゆる世紀から、勤勉かつ驚くほど徹底的に身体運動に関する覚え書きを集め、それらを無数の論文で伝えた。ほんの僅かなことでも、彼は非常にきちようめんな誠実さで取り扱った。それ故、人々は史料自体と同じように、彼が書いたことを利用することができる。その場合、彼は自分自身あるいは他人を鼓舞するために歴史を研究してはいない。また、過去の中から発展の法則を読み取り、それによって将来への道を読み取るために、歴史を研究したのでもない。彼にとって重要なのは、客観的な真実の発見だけである。全く同様に、客観的な真実が実践的な価値を持っている。彼は事物に関するいかなる尺度も持っていなかった。彼は真実を、それが実際の歴史の中で果たした役割に従って評価したのではなく、真実を論証するために彼が費やした英知の度合い

に従って評価した」……「基本的な個別研究によって体育の歴史に対して多くの価値ある、しかも学問的に有用な史料を集めた人物として、彼は歴史に残るだろう」²⁷⁾。

ヴァスマンスドルフ自身は、1890年代のランプレヒトを中心とした歴史学における方法論争について、明確な見解を残してはいない。しかし、彼の諸論文を通読するならば、彼が歴史を法則的に理解するよりも、事実を史料によって実証することに忠実であったことは明白である。ギリシャ語、ラテン語、フランス語、英語などの語学力と言語学的な知識とを身に付けていた彼は、当時刊行されつつあったドイツ中・近世の様々な分野の史料を援用しながら、そこから身体運動に関する事実を発掘すると同時に、それまで知られていなかった身体運動に関する様々な史料の紹介にも努めている。この点では、ヴァスマンスドルフは正にドイツ近代歴史学の成立期にある研究者の一人であった。

ノイエンドルフのように、ヴァスマンスドルフの歴史研究における実証主義的な態度を批判することは容易である。しかし、歴史研究の第一歩が常に史料に基づく歴史的事実の実証にあることを考慮するならば、彼が残したドイツ中・近世の身体運動の歴史に関する業績は、再評価されてしかるべきであろう。

注

1. 本稿では、「身体運動(Leibesübung)」を「スポーツ」と同義に使用する。また、「Turnen」という語は、それが身体運動を意味する場合には「体操」と、身体教育を意味する場合には「体育」と訳出した。
2. ドイツの中世及び初期近世におけるスポーツに関する先行研究については、拙稿：ドイツ中世スポーツ史研究の課題，山口大学教育学部 研究論叢，第30巻(1980)第3部，127-142頁，を参照されたい。
3. Budik, A. P., Ursprung, Ausbildung, Abnahme und Verfall des Turniers. Wien 1836.; Niedner, F., Das deutsche Turnier im XII. und XIII. Jahrhundert. Berlin 1881.; Schultz, A., Das höfische Leben zur Zeit Minnesinger. Bd. 2. Osnabrück 1965 (1889), S. 106-150.; Hendel, J. C., Archiv für deutsche Schützengesellschaften. 3 Bde. Halle 1801-02.; Freytag, G., Bilder aus der deutschen Vergangenheit. Leipzig 1867.; Edelman, A., Schützenwesen und Schützenfeste der deutschen Städte vom 13. bis zum 18. Jahrhundert. München 1890.; Hergsell, G., Die Fechtkunst im XV. und XVI. Jahrhundert. Prag 1896.
4. Baron, C. M., Geschichte der Leibesübungen. Limbach 1865.; Angerstein, E., Grundzüge der Geschichte und Entwicklung der Leibesübungen. Wien/Leipzig 1897.; Euler, C., Geschichte des Turnunterrichts. Gotha 1881.; Brendicke, H., Grundriss zur Geschichte der Leibesübungen. Köthen 1882.; Iselin, F., Geschichte der Leibesübungen. Leipzig 1886.
5. Lange, F. A., Die Leibesübungen. Eine Darstellungen des Werdens der Turnkunst in ihrer pädagogischen und kulturhistorischen Bedeutung. Gotha 1863.
6. Bintz, J., Die Leibesübungen des Mittelalters. Gurfersloh 1880. ヴァスマンスドルフはこの著作の書評を行っている：Neue Jahrbücher für die Turnkunst. 1880. S. 128-133.
7. 例えば，Meyer, W. L., Die leibliche Leistungen der Ritter im Mittelalter. In: Deutsche Turn-Zeitung. 1866. S. 162-164.; Pawel, J., Die leibliche Ergötzlichkeiten der Bauern und Bürger im Mittelalter. In: Deutsche Turn-Zeitung. 1891. S. 211-213, 229-231; Krampe, W., Leibesübungen und Jugendspiele in deutschen Schule früherer Jahrhunderte. In: Deutsche Turn-Zeitung. 1891. S. 527 ff.; Lion, J. C., Das Ringen im Grüblein. In: Deutsche Turn-Zeitung. 1861. S. 135-137.;

- Maßmann, H. F., Fabian von Auerswald. In: Deutsche Turn-Zeitung. 1861. S. 159.
8. 岸野雄三, 体育史, 大修館書店, 昭和48年, 132頁。
9. M(eier), G., Doktor Karl Wassmannsdorff. Zu seinem 70. Geburtstage. In: Jahrbücher der deutschen Turnkunst. 1891. S. 129-134.; Böttcher, A. M., Dr. Karl Wassmannsdorff. Zu seinem achtzigsten Geburtstage. In: Deutsche Turn-Zeitung. 1901. S. 303-306.; Böttcher, A. M., Dr. Karl Wassmannsdorff. In: Deutsche Turn-Zeitung. 1906. S. 631-633.; Neuendorff, E., Dr. Karl Wassmannsdorff. In: Monatschrift für das Turnwesen. 1906. S. 289-294.; Euler, C., Dr. Karl Wassmannsdorff. In: Monatschrift für das Turnwesen. 1886. S. 89-97.
10. Jahn, F. L. & E. Eiselen, Die deutsche Turnkunst zur Einrichtung der Turnplätze. Berlin 1816.
11. GutsMuths, J. C., Gymnastik für die Jugend. Schnepfenthal 1793; Vieth, A., Encyclopädie der Leibesübungen. Berlin 1794/95; Lübeck, W., Lehr- und Handbuch der deutschen Turnkunst. Frankfurt a. M. 1843.
12. Böttcher, A. M., Dr. Karl Wassmannsdorff. In: Deutsche Turn-Zeitung. 1906. S. 632.
13. Spieß, A., Die Lehre der Turnkunst. Bd. 4. Das Turnen in den Gemeinübungen. Basel 1846; Böttcher, A. M., Dr. Karl Wassmannsdorff. In: Deutsche Turn-Zeitung. 1906. S. 632.
14. Wassmannsdorff, K., Würdigung der Spieß'schen Turnlehre. Basel 1845.
15. 楠戸一彦, スポーツ史資料: K. ヴァスマンズドルフ(1820—1906)の文献目録, 広島大学総合科学部紀要 VI 保健体育学研究, 第9巻(1991), 37-51頁。
16. 前掲書
17. ユリウス・ボフス著, 稲垣正浩訳, 入門スポーツ史, 大修館書店, 1988, 127-136頁。
18. Wassmannsdorff, K., Turnen und Fechten in früheren Jahrhunderten. Aufsätzen zur Geschichte der deutschen Leibesübungen aus der Festzeitung für das siebente deutsche Turnfest München 1889. Heidelberg 1890. S. IX.
19. Wassmannsdorff, K., Ibid., S. XI.
20. Kloss, M., Das Hantelbüchlein. Leipzig 1858.
21. Wassmannsdorff, K., Kloss, M.: Das Hantelbüchlein, Leipzig, Weber, 1858. In: Neue Jahrbücher für die Turnkunst. 1858. S. 326-335.
22. Böttcher, A. M., Dr. Karl Wassmannsdorff. Zu seinem achtzigsten Geburtstage. In: Deutsche Turn-Zeitung. 1901. S. 305.
23. Böttcher, A. M., Ibid., S. 305.
24. Wassmannsdorff, K., Deutsches Schulturnen vor Basedow, oder: Die Turnübungen der beiden ältesten deutschen Adelsschulen. In: Deutsche Turn-Zeitung. 1870. S. 35/36.
25. Wassmannsdorff, K., Turnerische Bildung Bayerischer Fürsten, besonders des Herzogs Christoph von Bayern. In: Deutsche Turn-Zeitung. 1875. S. 177.
26. Wassmannsdorff, K., Aus dem Turn- und Jugendleben in Schnepfenthal unter GutsMuths, von 1787-1839. In: Jahrbücher der deutschen Turnkunst. 1884. S. 233.
27. Neuendorff, E., Dr. Karl Wassmannsdorff. In: Monatschrift für das Turnwesen. 1906. S. 291. und S. 294.